

中国人留学生の日本観

孫 長虹

1. はじめに

「留学という異文化との直接的な接触経験は、間接的な情報による接触に比べ、留学した国や国民に対する態度やその後の行動に大きな影響を与えることができる」と、¹ 岩男寿美子・萩原滋氏（以下すべて敬称略）は、述べている。

中国では、「留美的親美、留日的反日」²（アメリカに留学した者は親米派になり、日本に留学した者は反日派になる）という言い方がある。これに関する実証的な研究はほとんどないが、日本に対しマイナスイメージを持っている中国人留学生が存在していることは否定できない。特に日本で厳しい経済状況の中に置かれている就学生や私費留学生は、彼らの日本観には厳しいものがあるようである。

しかし、一方、帰国留学生の日本観に関する研究³では、中国人帰国留学生の日本観は全体として、プラスイメージを有しているという。

これからの中日関係を担う中国の若い世代の日本観はどのようなものなのか。特に日本留学を経験した若い中国知識人層の日本観を明らかにすることによって、中国人留学生の日本観に影響を与える要因は何であるのか、中国人留学生はどのように日本を感じているのか、を明らかにしたい。彼らの留学体験によって形成される日本観を手がかりに、よりよい相互理解をはかるため、今後の中国における日本文化理解教育のポイントを探りたいと思う。

2. 在日留学生の日本観

中国人留学生は在留資格で言えば、「留学生」と「就学生」に分けられる。そして、「留学生」の中で、「私費留学生」は絶対多数を占めている。留学生は日本での体験によって、日本に対し、共通する認識を持つ一方、それぞれの境遇の違いによって、違う認識を持っている。

「就学生」と「私費留学生」とは、経済的に弱い立場にいるということは共通する部分であるが、いろいろな面において違う様相を呈しているので、分けて考える必要があると思う。

中国人就学生 に関する先行研究として、岡益巳⁴、加賀美常美代⁵、山崎瑞紀⁶、邵春芬⁷、莫邦富⁸、鋤柄治朗⁹、外国人就学生・留学生研究会¹⁰の研究・著書が挙げられる。

法務省の「出入国管理基本計画(第2次)」¹¹によると、1998年における中国人就学生の数は6,518人で、全体の約45%を占めている。「就学生」とは、日本語学校で学ぶ人たちのことを言う。就学生の中には、大卒の人もいれば、短大や専門学校卒業、高卒の人もいる。その比率ははっきりしていない。

岡益巳・深田博己の『中国人留学生と日本』¹²によれば、長船日本語学院の友野佳世は次のように指摘する。中国人就学生の80%は進学希望であるが、本当に勉強したいと思っているのはせいぜい20%で、60%は「帰国したくない」ための方便であり、具体的な学習目標を持っていない。残りの20%ははっきりした「出稼ぎ」である、という。

一方、加賀美常美代の調査¹³によると、1991年3月1日から3月15日まで、東京と神戸にある日本語学校に在籍する中国人就学生300人中181人の回答者の中で、大学卒業が40%であり、短大と専門学校卒業以上を含めると、高学歴をもつ人は過半数を超え、来日の目的は「進学」が過半数にのぼり、日本語学校卒業後の予定は、「大学・大学院進学希望」が21%であるという。

就学生の多くは言葉を習得していないため、学費を稼ぐためのアルバイトは、体力を使う仕事につくことが多い。今までの研究によると、日本人とかわりの多いのは、バイト先の日本人であって、中国人就学生の異文化接触における不満の決定因は、アルバイト先に由来するという結果が出ている¹⁴。また、中国人就学生の日本観もアルバイト先の体験が彼らの日本に対するイメージの決定因となり、「極端な否定的なイメージ」¹⁵と位置付けられている。

日本人とのバイト先でのトラブルは、就学生は大学生の3倍近く(大学生は13.6%、就学生は36.4%)であって、日本社会に対する不満度が、大学

生の2倍になる¹⁶。すなわち、日本社会及び日本人に対する態度に関しては、大学生に比べて、就学生はよりネガティブである。日本での生活に、孤独・苦痛・つまらないといった否定的な感情を抱く者は、大学生では42%であるのに対し、日本語学校生では75%にも達している。

また、大学生は約4割が奨学金をもらっているのに対し、日本語学校生は98%の人が奨学金をもらっていないのが現状である。また大学に在学する留学生は、大学の授業料の免除を受けることもできるが、就学生の日本語学校の授業料は割高である上に、免除されない。さらに来日する時に、借金を背負うケースも少なくない。このように、留学生に比べれば、就学生は厳しい状況下に置かれているのが明らかである。

中国人就学生の80%以上が、ブルーカラーの職種についていて、そしてアルバイト先での処遇や日本人の態度が差別的であるという不満が最も多いと指摘されている¹⁷。中国人就学生がアルバイト先で感じた不満や被差別感 は日本人に対する不信感を深め、日本人との接触を回避させ、敵意を助長させることも予想できる。したがって、「留日反日」(日本へ留学して、反日感情を抱く)という傾向が、中国人就学生の中に存在するのは否定できない。

このように、就学生は日本に対し、マイナス評価を持つ一方、『留学生新聞』¹⁸の1992年1月末に実施したアンケート調査によると、84.6%の中国人就学生回答者は、日本語学校の教師の質に「満足する」と答えていて¹⁹、日本人教師にいいイメージを持っているという。

就学生の日本語能力の不足によって、厳しい状況の中での生活維持のためのアルバイトは、精神的にストレスの多いものとなる。日本語能力不足によって引き起こすトラブルは、就学生のバイト先での不満の重要な要因であるが、一部の就学生自身の問題にも一因があるのではないかという指摘がある。中国人就学生は、時給や仕事条件のいいバイトにすぐ飛び移り、突然辞めることによって、元の職場に迷惑をかけることがあって、結果的に中国人就学生自身のイメージを悪くすることになるという²⁰。

中国人就学生の中で、高学歴を持つ人であればあるほど、日本においての異文化接触に対し、高い不満を持っている²¹。就学生は、留学生に比べると、奨学金や学割、医療費の補助など冷遇されている。さらに、大学卒というプライドを持ちながら、アルバイト先で学歴が正当に認められず、「どんな人でも、あなたに命令することができる」²²というギャップを強く感じ

るのである。

在日中国人就学生は、中国人留学生の中で、一番厳しい状況に置かれている。そのため日本に対する感情は「反日」になるのではないかと思われがちであるが、唯一の帰国就学生に対する調査「就学生・留学生およびその帰国者に関する実態調査」²³において、「留日反日」という構図は、必ずしも強く現れているのは見られなかった。むしろ、日本での経験は、帰国してから自分の人生に対する貴重な経験であるととらえる人が少なくない。

2001年、中国からの留学生数は44,014人であり、そのうち私費留学生が圧倒的に多く、42,301人である²⁴。

今までの中国人留学生を対象とする研究やアンケート調査においては、対象となる被調査者がほとんどはっきりと区別されていない。大学内における身分・環境の違い・経済的状况などによって、日本での体験は違う内容になり、日本観の内容も違ってくると予想される。

ここで言う「私費留学生」の日本観は、今までの研究に基づいた考察であるので、厳密に「私費留学生」の日本観であると、言い切ることができない部分もある。しかし、私費留学生は中国人留学生の大部分を占めているので、これらの研究調査は中国人私費留学生の日本観を反映している研究であると言えるであろう。

今までの中国人私費留学生の日本観に関する研究・調査は、浅野慎一²⁵、岡益巳²⁶、鋤柄治郎²⁷、ライフデザイン研究 Vol.3 / No.2 『中国人留学生の日本人観』²⁸、『留学生新聞』読者アンケート²⁹、徐光興³⁰、邵春芬³¹、劉年³²などがあげられる。

大学に在籍する「留学生」は、日本人との接触の幅が「就学生」より広く、アルバイト先の日本人との接触は勿論のこと、大学における先生、先輩・後輩とのかかわりも、留学生活における大きな部分を占めている。東京大学の留学生相談室の栖原暁によると、1998年の東京大学在学中の中国人留学生からの相談内容は、四分の一が学位や入進学、日本語などの就学に関するもので、次に宿舎探し(20%)、経済問題(17%)、日本人との交流(11%)、その他などの順である³³。私費留学生は大学生活の中で、学業に関する悩みが一番大きいといえる。

特に大学院生は、大学内において周りの日本人との関係のいかんによって、

留学に大きな影響を及ぼすこともあり得る。『中国人留学生の日本人観』³⁴によれば、周りの日本人との関係において、アルバイト先の日本人との関係より、むしろ日本人学生の先輩・後輩との関係に戸惑いを感じている。

うまくいっている	
1. 保証人	54.2%
2. 日本人の先生	39.6%
3. 日本人の友人	32.3%
4. アルバイト先の日本人の上司・同僚	27.2%
5. 大家さん・寮の管理人・近所の人	25.2%
6. 日本人の先輩	22.9%
7. 日本人の後輩	19.2%

(『中国人留学生の日本人観』, p19)

また、浅野慎一の研究は中国人留学生、特に理科系の学生について日本人との関係は大学内の研究面に限定されがちであると指摘している³⁵。

専門で分からないときは先生や学生に聞く。生活のことは誰にも相談せず、自分で解決する。日本人の学生は親切だが、あまり話しかけてこない。日本人と友達になるのは難しい。私は日本語ができないから。

(浅野, 1997, p167)

日本人学生の考え方がまだよくわからないので、雰囲気慣れるには、しばらく時間がかかりそうである。

(外国人留学生受入れの実態と課題[調査報告]³⁶, 1998, p112)

周玉慧の研究³⁷によれば、次のようなことが分かる。中国人留学生は先生および周りの日本人学生に多くのサポートを求めているが、期待していたサポートと実際に受け取ったサポートとの間に差があって、中国人留学生の大学における期待が満たされていない。

中国人留学生は留学した当初、言葉の問題によって、大学内における人間関係がうまくいかないことがある。しかし、彼らは日本人との友好的関係をつよく望み、日本語が上手になるにつれ日本人といい関係をきずくようになり、「一生付き合える日本人の院生がいる。私のことに関心を示し、いろいろ助けてくれる。研究の方では先生も一生付き合える。友達を作るのは楽しい。もしこういう友人ができなかったら、留学は失敗だ。」³⁸ という。この

ような見方は、中国人留学生の大学における人間関係が、留学の成功を左右する要因であると同時に、中国人留学生の日本観を決定する重要なものでもあることを示す。

学費、生活費を得るためのアルバイトは、私費留学生にとって日本留学生活の中の不可欠の部分である。アルバイト体験は就学生と同様、彼らの日本観、とりわけ日本人観に無視できない大きな影響を与えている。私費留学生は、生活費と学費を確保するために、単純労働に従事し、身体的疲労とともに、大学卒でありながら単純労働に従事しなければならない心理的なアンバランスを持っている。さらに日本特有の「親分・子分」「先輩・後輩」「絶対服従」といった対人関係のパターンと日本語能力の不足のため、アルバイト体験は彼らにとって耐えがたいものがあったようである。

邵春芬の研究によると、中国人私費留学生の日本観は、就学生と同様、否定的なイメージで、対日感情は反日的である。彼らは私費で来日し、肉体労働のアルバイトで留学生生活を支え、都市下層に組み込まれる不愉快な生活体験と、アルバイト先の日本人との人間関係に基づいて、彼らの対日観を決定する、という。また日本人の欧米重視・アジア軽視という風潮も中国人留学生の対日観をマイナスの方向に向かわせる。

ライフデザイン研究所の調査によると、中国人留学生の日本での悩みは、一位は「生活費・学費が高すぎる」(52.7%)、二位は「日本人が中国人をバカにしている」(37.5%)と答えている。

しかし一方、バイト先で日本人と良い関係を築きあげた例も少なくはない。「アルバイト先のおじさんがとても親切にしてくれた」「工場で仕事をしてきた。親方は二人いるが、二人とも人情味が厚くて本当にいい人だ。日本に来て良かったと思う」³⁹と、アルバイト先の人間関係によって、中国人私費留学生の日本に対する感情は、プラスかマイナスの方向へと変化する。

留学生の中で、一部経済的に恵まれている 国費留学生 がいる。2001年の中国人留学生 44,014 人の中、1,713 人⁴⁰が国費留学生である。

国費留学生は、私費留学生に比べれば、私費留学生の一番の悩みである、「学費・生活費」という問題に無縁であると言える。邵春芬の研究によると、経済的圧力がなく、私費留学生と違って、国費留学生の日本観は、「非常に肯定的なイメージ」⁴¹であるという。

留学生に奨学金を提供することは、留学生の勉強、生活を助けることに大

きな意味を持ち、留学生が日本・日本人を好きになるうえで、何らかの役割を果たしているのであろうと推測しがちである。しかし、ライフデザイン研究所の調査によると、「奨学金の受給と、日本人像、日本国好感度、日本人好感度とはほとんど相関が見られなかった」⁴² という結果がある。やはり、日本での様々な経験が、留学生の日本観の形成要因になると思われる。

国費留学生は経済的問題がほとんどないため、私費留学生のように「学費・生活費」を稼ぐためのアルバイトをする必要はないはずであるが、その実態ははっきりしていない。邵春芬⁴³、浅野慎一の研究⁴⁴によると、国費留学生はほとんどアルバイトをしていなくて、そして国費留学生の日本とのかかわりは、大学内、しかも研究面に限定されがちである。国費留学生は生活面での深刻な問題が少ないために、研究面で先生や日本人学生と相談するが、生活面ではほとんど相談しない。よって、彼らには「信頼して相談できる」「一生付き合える」日本人は極めて少ないという指摘がある⁴⁵。

国費留学生が普段付き合っているのは、大学の先生、日本人学生に限定されがちである。彼らは私費留学生と違って、アルバイト先での辛い体験を持っておらず、周りの親切にしてくれた日本人によって、彼らの日本・日本人に対する肯定的なイメージが形成されるわけである⁴⁶。このように、経済的な圧迫が無く、研究に専念できる国費留学生は、日本人との付き合いに満足し、その日本観はおおむね肯定的である。

しかし、彼らは私費留学生と同様、大学内における人間関係に戸惑いを感じる場合が少なくない⁴⁷。

国費留学生は、大学内の日本人の勤勉さを高く評価しながらも、日本の大学内における「上下関係」「表裏・本音と建前」「希薄・疎遠」「集団主義」というような日本文化様式に戸惑いを強く感じ、否定的に評価する⁴⁸。

また、彼ら本人の体験ではないが、入国管理局・不動産屋・バイト先などの日本人との関係で差別を受けた留学生仲間の体験の伝聞もあり⁴⁹、彼らの日本観に少なからずマイナスの影響を与えていることは否定できない。

では、全体としての中国人留学生の日本に対するイメージは、どのような傾向を示しているのであろうか。ライフデザイン研究所の「中国人留学生の日本人観」調査においては、日本国 および 日本人 に対する全体的な評価は、中間的、そしてややプラス評価の結果が出ている。

	日本国に対する好感度	日本人に対する好感度
好 き	44.7%	27.1%
どちらとも言えない	41.9%	53.8%
嫌 い	13.5%	19.1%

(『中国人留学生の日本人観』, p26)

そして、日本国が好きであると答えた人は全体から言えば多数であるのに対し、日本人に対しての評価は中間派が最も多い。日本人の友人が多いほど、日本・日本人に対して、好感を持っている人が多くなっている⁵⁰。日本人の考え方が分からない、心の親友がいない、そして軽蔑されると悩みを抱える中国人留学生は、調査結果から見ると、日本・日本人を割りとネガティブに評価することがわかる。日本人との関係を親密に保つことは、留学生の日本人に対する好感度を高める一つの鍵であると言えよう。

3. 帰国留学生の日本観

日本はアメリカに次いで中国人の第二の留学先である。海外に留学した人のうち、中国に戻ってきた人の比率は、日本留学帰国者は37%であり、他の主要留学先に比べて高い割合を占めている。1996年の時点で、中国内の帰国留学生総数7万人のうち、1万5千人の留学生が日本から帰国して、五分の一以上に達している⁵¹。そして、多くの日本留学経験者は、大学や研究機関に在籍していて、大きな役割を果たしている。

中国人日本留学帰国者の先行研究として、遠藤誉⁵²、徐光興⁵³、奥川義尚⁵⁴の研究があげられる。

遠藤誉の研究は、帰国した欧米留学生と日本留学生を対象に行ったものである。日本留学生の被調査者の29.9%が中国政府公費派遣であり、日本文部省国費留学生が28.6%である。そして、留学年数が1年以下の者が、全体の34.4%も占めている。すなわち、被調査者の多くは、中国語で「進修生」と呼ばれる人たちで、日本では「研究生」の部類に入る。

徐光興の研究の対象者は大学学部・大学院の研究生経験を有したものが60.2%であり、被調査者の多数を占めている。そして被調査者の半数は大学・研究所の職に集中している。

奥川義尚は、「国費留学生」「中国政府公費派遣留学生」「私費留学生」に

わけて、それぞれの日本観を考察した。この中での人員構成は、中国政府公費派遣留学生は58.7%を占めている。

つまり、三つの調査の対象者の多くは中国政府派遣であり、日本で「研究生」という身分で滞在し、そして、ほとんど中国の大学、研究所に勤める人たちである。優遇された存在といえる政府派遣と国費留学生は、私費留学生とちがって、経済的圧力が少ないため、アルバイトをとおしての日本人との日常的接触は相対的に少ない。

しかし、日本人との生身のコミュニケーションは、本来の留学の重要な要素であるはずだが、その接触の結果が、時には日本人へのイメージの悪化となって現れてくる。この傾向は、私費留学生に顕著であると、先行研究の結果から見られる。

日本へ留学してくる人達は、日本へ入国した後に遭う「欧米崇拜、アジア蔑視」といった日本の風潮、あるいは指導教官との関係、入管の係官の態度などにより、日本が嫌いになり、侵略戦争という歴史で教わった日本に対する先入観もあって、「留日反日」という構図が出てくることも否定できない。

しかし、遠藤誉の調査⁵⁵において、滞日する私費留学生との面談では、言葉が分からず、アルバイト時に苦勞し生活も辛いと述べているので、日本、日本人に反感を持っていると推測されたが、数多くの日本からの帰国私費留学生は、日本にかなり好感を持っている。対日観がもっとも厳しいと思われる就学生は、帰国後日本留学について肯定的な評価は73.8%であるという結果がある。そして、日本留学に関しては、「日本で苦しい生活をしたことは確かだが、人生の試練と思い、絶対後悔しない」という⁵⁶。そして、在日留学生より帰国留学生の方が日本に対する全体的なイメージが良好なものになっていることが確かめられた⁵⁷。

このように、帰国留学生は留学を終え、国に帰って日本での留学をふりかえる時、日本人の公衆道徳、社会規範、集団主義的傾向、仕事への勤勉な態度、国民性など、中国人が学ぶべき点としてよく挙げられる⁵⁸。これは帰国留学生の日本に対するいいイメージにつながると考えられる。

しかし、同時に多くの帰国留学生が「日本社会の閉鎖性」、「欧米を崇拜し、アジアを見下す」、「偏見や差別」など、そうした対人関係に直結する要因を大きな問題として強く感じていて、自分たちに対する日本人の態度に心奥の民族的自尊心を傷つけられ、それが「留日反日」という原因になるのではな

いかという指摘もある⁵⁹。

では、私費留学生と公費派遣では、留学先国への好感度に差はあるのだろうか。私費留学生の経済的困窮は良い印象を幾分そこなうであろうと推測できる。「全く好感を持たない」という回答では、私費留学生は5.5%であるのに対して、国家派遣生は2.4%であり、やや格差が見られるということである⁶⁰。やはり、私費留学生の日本を見る目は厳しいものがあると感じられる。

三つの研究調査対象の多くは、中国政府派遣留学生で、留学生の大半を占める私費留学生と違う生活体験を持っている。したがって、経済的に弱い立場にいて、厳しい経験をした留学生の日本に対するマイナスイメージは、留学生の日本観の一部であることはやはり否定できない。

4. まとめ

中国人留学生の中、就学生の日本観は、大学に在籍する私費留学生と国費留学生に比べて、日本に対するイメージがマイナスになる決定因が多いと見られる。日本での経験は後に役に立つと感じる人がいる一方、「留日反日」の人たちはやはり否定できない存在である。彼らの日本に対するマイナスイメージは主に、経済的重圧、さらに学費を稼ぐためのアルバイトにおける経験によるものであると言える。この点において、私費留学生にも同じことが言えよう。経済的悩みのない国費留学生は、研究活動中の日本人との人間関係に、多く悩みを抱えている。そして、人間関係と言えば、就学生も私費留学生も、アルバイトの中の苦い経験は、職場での日本人の行動様式、思考様式に対する困惑に由来するところが多いと言える。留学生全体が日本で経験した最も愉快・不愉快なことは、どちらも日本人との人間関係に関わるエピソードである⁶¹。留学生は日本人の友人が多いほど、日本・日本人に対して、好感を持っている人が多くなっている。

留学生として日本に学びに行ったときに、学習してくるのは、けっして学問だけではなく、その国の国民性、ものの考え方、風土といったものが必ず付随してくる。留学生は私費・国費を問わず、日本人との人間関係が何よりも重要な役割を果たしている。これによって、プラスイメージ・マイナスイメージが形成される。そして、留学生の多くは、「日本人の考え方」や「外

国人に対する日本人の態度」といった、日本人との人間関係に直接かかわるような事項に大きな障害を感じるのである。

山崎瑞紀の研究⁶²によると、対日態度に影響する要因として挙げられるのは、滞日期間・経済状況・差別経験・対人関係である。そして、対人関係・差別経験は決定的な要素であると述べている。

一方、中国人留学生の対人関係における不適応については、ひたすら日本の文化と中国文化との違いにばかり不適応を訴えるのではなく、相手の文化に対する積極的な理解の姿勢も必要不可欠である。異文化体験は、自分の文化を基準に相手の文化を判断するのではなく、自国の文化を保ちながら、相手の国の文化に適応していく姿勢が求められている。

中国人留学生の日本での対人関係の問題は、日本観形成の最も重要なポイントである。しかし、それは問題として意識されているが、そのメカニズムについてあまり研究されていない。中国人留学生は、異文化環境において異なる文化に対して、いかに捉えているのか。不適応・困惑と訴えている内容がどのような特徴を持っているのか。無意識のうちに自分の文化で相手の文化を判断しているのではないのか。今後、体験者側からの視点に立つ異文化環境における「対人関係」に焦点をあてる研究が、日本留学を成功させるための手助けに、ヒントを与えてくれるものになるだろうと考えられる。そして、これからの中国の日本語教育において、こうした「対人関係」における日本文化の理解をはかるための知識の授与と、相手の文化を積極的に理解しようとする異文化理解に必要な態度の育成が求められると思われる。

注

- 1 岡益巳・深田博己著，1995.1，『中国人留学生と日本』，白帝社，p
- 2 莫邦富，1993.4，『中国人ジャーナリストが見た来日中国人の素顔』，海風書房，p12
邵春芬，2000，「在日中国人の日本観 - 留学生・就学生を事例として」，『東京女子大学比較文化研究所紀要』，第61巻，東京女子大学比較文化研究所刊，p91
- 3 遠藤誉（研究代表者），平成6・7・8年度文部省科学研究費補助金・国際学術研究・学術調査報告書，『帰国中国人留学生の比較追跡調査による留学生教育の改善と展望に関わる研究』
徐光興，1996，「帰国留学生の対日イメージと態度に関する研究」，『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科』，第43巻
奥川義尚・梶川裕司，1999，「中国人元留学生の帰国後の日本留学評価に関する

- 一考察」, 京都外国語大学[編], 『Cosmica』, Vol.29
 (参考 奥川義尚・梶川裕司, 2000, 「在日中国人元留学生の日本留学評価に
 関する一考察」, 京都外国語大学[編], 『Cosmica』, Vol.30)
- 4 岡益巳・深田博己著, 1995.1, 「第3章 中国人就学生問題の所在」, 「第10章 中国人留学生と就学生の意識」, p183
 - 5 加賀美常美代, 1994.5, 「異文化接触における不満の決定因 中国人就学生の場合」, 『異文化間教育』(8号), 異文化間教育学会編集, アカデミア出版会, p122
 - 6 山崎瑞紀, 1996.2, 「アジア出身の留学生及び就学生の日本観」, 『学術研究(教育心理学編)』, 第44号, 早稲田大学教育学部
 - 7 邵春芬, 1995, 「留学戦略の決定要因について—中国人留学生・就学生の場合」 『社会学論考』, Vol.16, 東京都立大学大学院社会学研究会[編]
 邵春芬, 2000,
 - 8 莫邦富著, 1992.9, 『ニッポン就学生事情 ジパングをめざした中国人たち』, アルク
 - 9 鋤柄治朗・鈴木章子編, 1992.2, 『あなたは日本が好きですか 中国人留学生の声』, 黄河(星雲社)
 - 10 外国人就学生・留学生研究会, 「就学生・留学生およびその帰国者に関する実態調査」, 手塚和彰[ほか]編, 1992.3, 『外国人労働者の就労実態 総合的実態調査報告集』, 明石書店
 - 11 法務省ホームページ, <http://www.moj.go.jp/PRESS/000300-2/000300-2-2.html>
 平成12年3月24日, 法務省告示第百十九号, 「出入国管理基本計画(第2次)」,
 外国人の入国・在留をめぐる顕著な状況, 1. 入国・在留外国人の総体的増加と主な在留資格をめぐる動向, (3)留学生・就学生の受入れ状況と受入れの適正化への取組
 - 12 岡益巳・深田博己著, 1995.1, p62
 - 13 加賀美常美代, 1994.5, p122
 - 14 加賀美常美代, 1994.5, p123
 - 15 邵春芬, 2000, p95
 - 16 岡益巳・深田博己著, 1995.1, p195
 - 17 加賀美常美代, 1994.5, p122
 - 18 日本僑報社, 『留学生新聞』(中国語紙), アジアパシフィックコミュニケーションズ
 - 19 岡益巳・深田博己著, 1995.1, p191
 - 20 阿部精二, 1996.9, 『中国人就学生: 泣き笑いの記録』, 白帝社, p13
 - 21 加賀美常美代, 1994.5, p124
 - 22 邵春芬, 2000, p100
 - 23 外国人就学生・留学生研究会, p507~743
 - 24 文部省ホームページ, 2002.7.10, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/koutou.htm
 「我が国の留学制度の概要」(平成14年度版)
 - 25 浅野慎一著, 1997.2, 『日本で学ぶアジア系外国人 研修生・留学生・就学生の

- 生活と文化変容』, 大学教育出版
- 26 岡益巳・深田博己著, 1995.1
- 27 鋤柄治郎・鈴木章子編, 1992.2
- 28 丁謙(研究担当者), 1994.10, 『中国人留学生の日本人観』, ライフデザイン研究所
- 29 駒井洋編著, 1995.2, 『外国人定住問題資料集成』, 明石書店, 「在日華人の実態: 『留学生新聞』読者アンケート報告」
- 30 徐光興・蔭山英順, 1994, 「在日中国人留学生の適応に関する実態と問題」, 『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科』, 第41巻
- 31 邵春芬, 2000
- 32 劉年, 2000.3, 「在日外国人留学生問題に関する研究 中国人留学生からみる留学生問題」, 立正大学社会学・社会福祉学会[編], 『立正大学社会学・社会福祉学論叢』, 第33号
- 33 栖原暁, 1999.10, 「日本で学ぶ中国人留学生」, 歴史教育者協議会, 『歴史地理教育』(599), p12
- 34 丁謙, 1994.10, p19
- 35 浅野真一氏の研究は、中国人私費留学生を理科系と文科系を分けて論じている。理科系私費留学生の特徴として、日本語をあまり学んでいなくて、その多くは第一留学先は英語圏である。彼らの主な来日動機は「学位の取得」である。彼らは「専門性」をきわめて重視し、その修得に専念する。よって、日本での生活は研究が中心で、それ以外のことには関心が広がりにくい。経済的苦境に直面するが、アルバイトは生存ギリギリの最低限にとどめる。
- 一方、文科系私費留学生は来日する前に、日本語既習者が多く、言語面において、理科系私費留学生より有利にたっている。来日する前に日本語を通して、日本に対しある程度の知識と理解を持っている。そして理工系のように一日中、研究室にこもる必要も無く、わりと自由な時間ももてる。自分の言語の力量にたよるアルバイトに従事する。そして、彼らはむしろ学校外の日本人との関係が主である。
- 36 日本労働研究機構, 1998.3, 『外国人留学生受け入れの実態と課題 支援機関・留学生・企業ヒアリング調査結果報告』, 資料シリーズ No.80
- 37 周玉慧, 1993.3, 「在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み」, 『社会心理学研究』, 第8巻第3号, 日本社会心理学会, p239
- 周玉慧, 1994.3, 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元 - 必要とするサポート・知覚されたサポート・実行されたサポートの間の関係」, 『社会心理学研究』, 第9巻第3号, 日本社会心理学会, p108
- 38 浅野慎一著, 1997.2, p167
- 39 丁謙, 1994.10, p117, 118
- 40 文部省ホームページ, 2002.7.10, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/koutou.htm
「我が国の留学制度の概要」(平成14年度版)
- 41 邵春芬, 2000, p100

- 42 丁謙, 1994.10, p 70
- 43 邵春芬, 2000, p 102
- 44 浅野慎一著, 1997.2, p 120, 134
- 45 浅野慎一著, 1997.2, p 165
- 46 邵春芬, 2000, p 102, 103
- 47 浅野慎一著, 1997.2, p 177
- 48 浅野慎一著, 1997.2, p 233, 245
- 49 浅野慎一著, 1997.2, 178
- 50 丁謙, 1994.10, p 71~73
- 51 李建保, 1996.6, 「留日帰国者の会が中国で4年目を迎える」, 『留学交流』, Vol.8, No.6, (財)日本国際教育協会編集
- 52 遠藤誉(研究代表者), 平成6・7・8年度
- 53 徐光興, 1996,
- 54 奥川義尚・梶川裕司, 1999,
奥川義尚・梶川裕司, 2000,
- 55 遠藤誉, 平成6・7・8年度, p 98
- 56 遠藤誉, 平成6・7・8年度, p 93
- 57 徐光興, 1996, p 90
- 58 遠藤誉, 平成6・7・8年度, p 91
- 59 徐光興, 1996, p 93
- 60 遠藤誉, 平成6・7・8年度, p 98
- 61 岩男寿美子・萩原滋, 1988.9, p 160
- 62 山崎瑞紀, 1996.2, p 41